

堀辰雄「燃ゆる頬」雑考

——《VITA SEXUALIS》としての二、三の問題——

大 森 郁之助

雑、集也。（揚子方言） 雑、聚也。（広雅）

I

「燃ゆる頬」は昭和七年一月号『文芸春秋』に発表された。後年、作者堀が「川端康成さんにはいい批評をしていたいたしたのは、いまだに忘れられない」（昭24・3角川書店刊『堀辰雄作品集第一・聖家族』あとがき）とした川端の評は、翌二月号『新潮』の「文芸時評」の中の、次のような一節である。

堀辰雄氏の「燃ゆる頬」は、少年の同性愛、性の目覚めによる少年の日の「脱皮」を扱ったものであるが、このやうに清潔な作品を、私は殆ど見たことがない。この作品を読んで、私は少年の日を思ひ出し、しかも私には少年の日などなかつたやうな嘆きに清められるのは、ここに少年の世界が描かれてゐるからではなく、この作品が気品の高い少年そのものだからである。／（略）少年の微妙な性感は、いたるところに細かい鋭さで洗ひ出されて、淡彩な筆触とは似もつかぬ、激しい官能の匂ひを放つてゐるけれども、しかしなによりも、みづみづしい清潔さが私を惹きつける。（以下略）

この、「激しい官能の匂ひを放つて」しかも「清潔」「気品」と川端が

見たところを、遙か後年、堀に親炙もした福永武彦は、「若さの持つ清潔な印象を定着した、好ましい短篇」という迄は同感した上でながら、作者によつて、「私のキタ・セクスアリス」と言はれてゐる（『引用者註、前引『作品集第一』あとがき）が、それにしてはあまりにも綺麗ごとにはすぎよう。

（「堀辰雄の作品」、昭43・10文治堂書店刊『福永武彦作品・批評B』。初出、新潮社版六卷本『堀辰雄全集』第一巻付録「月報」第一号）

と批判した。奇麗ごとへに過ぎる」というのは適不適に分ければ不適との判断であろうから批判というのだが、それはいわば素材事実とのつりあいに就いての判断であつて、作品表現そのものが如何あるかという点では川端の評とさほど異ならぬもの——福永自身の前・言とも矛盾はしないわけ——だろう。

そこで前者、素材事実に対しての適否問題だが、少々先取りするとこの作品には主人公「私」の対・同性交渉と対・異性交渉とが出てくるものの、後件は、実体を持った叙述としては、同性の相手と疎遠になり死別したのちの「数年の間に、私はまあ何んと多くの異様な声をした少女らに出会つたことか！」以下の、総計約百三十字にすぎない（その前々段での「妙に咳枯れた声」が「私をふしぎに魅惑した」漁村の少女との

遭遇は、それだけに終り、〈異性への目覚め〉のきつかけにとどまる。従って、この作品で表現の適不適を問題にされるにふさわしい題材は、その前の、「上級生たちから少年視されてゐた」同級生の美少年三枝との交渉（或いは更にその前の上級生魚住との接触も）と解すべきだろう。しかしこの、青年又は少年同士の友情以上の関係というのは、早くは鷗外の「キタ・セクスアリス」（明42・7）にも受身の立場で出てくるとはいえ、そうした文学作品からのイメエジ、または世間の風説としての概念以上の、体験的・実感的認識は、例えば異性間交渉とは違って、乏しい・又は全く持たない読者の方が普通であろう。となると、福永の〈奇麗ごと過ぎ〉説は一般読者としては主体的には同感も反論も困難で、〈そんなのかな〉といった聴き方しか出来まい。そして、その程度にでも〈聴く〉（そのまま承服するかどうかはともかく）場合の前提は、論者には（自分と違って）判断し得る根拠があるのだろう、という想像であらう。そしてその、想定される根拠としては、勿論その種文献の渉獵も考えられようが、より考えやすいのは論者自身の体験による裏付けということだろう。

この〈想像〉は、結果論ではあるがかなり具合よく、福永の〈自伝的〉長篇「草の花」（昭29・4）の存在と符合する。

「私は小説家として想像力によつて小説を組み立てる主義に属する」が「草の花」だけは例外（「草の花」遠望、昭47・3新潮社版「草の花（決定版）」とするこの作品は、主人公汐見茂思の旧制高校の下級生藤木忍への愛と、忍の死後の妹千枝子への愛との二件を中心とするが、後件は、少なくとも千枝子自身には、汐見が「兄を見た眼でわたくしを見、わたくしを見ながら兄のことを考へてゐる」（「春」）もののよう感じられていた。即ち、手っとり早くいえば、「燃ゆる頬」の同性愛を奇麗ごと過ぎるとする福永の見解は、それあるが故に相手の妹までも愛せしめた（？）^{（註1）}少なくともそういうプロットを構想せしめた）ほど。

の、彼自身の体験^{（註2）}から発していると考えられる、というわけである。念を押して置くがこの理解は、一般論としても「一人の芸術家の作品を知るためには、その作品のみがあれば足りる、作者の私生活の面まで詳しく知るには及ばないといふ主義」であり「私生活については人に知られたくないし、ましてや自分から公表しようなどといふ気はない」（「日の終りに」、昭44・8新潮社刊『別れの歌』）とする、福永自身の示唆に拠り、かつ、その範囲を越えてはいない。

そしてその「草の花」には、藤木忍に対する気持を「やましいものは何もないわけなんだね？」と訊かれた汐見が

やましいもの、physique 要素、……僕の心の奥深いところで、異質的な絃が鳴り渡り、何かが微妙に反撥した。（「第一の手帳」）

とある。フィジックな要素という觀念に「反撥」したというのだから自ら顧みてそれを求めてはいなかったわけだろうが、「微妙に」ともあるから、積極的または絶対的にそれを排していたというのでもなさそうである。少なくとも、一般にはフィジックな交渉をも含むものだという認識は持ち、その認識のもとで藤木忍に対していたものといえよう。

とすると、奇麗ごと過ぎるといふのは、端的に云えば、「燃ゆる頬」には「草の花」程度にさえも、フィジックな要素を含み得るもの。一般概念としては含むものであることが表われていない、という趣意でもあらうか？

確かに、現行（福永評が発表された昭和三十年代初も含めて）「燃ゆる頬」で美少年三枝が「静脈の透いて見えるやうな美しい皮膚」の持主だとか、

私は教室で、屢、教科書の蔭から、彼のほっそりした頸を偷み見てゐるやうなことさへあつた。

とかは、いわば第三者的な〈美の鑑賞〉の範囲内とも思えるから、性的関係に於けるフィジックな要素と做し得そうなのは、わずかに、夏休み

の小旅行の途中、小さな漁村の「もの悲し」い宿屋で、

私はそのうす暗いランプの光りで、寢床へ入らうとしてシャツをぬいでゐる、三枝の裸かになつた背中に、一とところだけ背骨が妙な具合に突起してゐるのを見つけた。私は何だかそれがいぢつて見たくなつた。(略) 私は彼を裸かにさせたまま、象牙でもいいぢるやうに、何度も撫でて見た。彼は目をつぶりながら、なんだか擦つたさうにしてゐた。

というあたりを、象徴的に解して、辛うじて、であろうか。この三枝の背の「脊椎カリエスの痕」は、作品末段のサナトリウムの場面で、「日光浴の結果」日に黒く焼けた、そして唇だけがほのかに紅い色をしてゐる細面の顔の下から、死んだ三枝の顔が透かしのやうに現れてゐる」一人の少年の背中にも発見される。

それは気持のいい朝だつた。私はそのとき自分の病室の窓から、向うのヴェランダに、その少年が猿股もはかずに素つ裸になつて日光浴をしてゐるのを見つけた。彼は少し前屈みになりながら、自分の体の或る部分をぢつと見入つてゐた。(略) 私の心臓ははげしく打つた。そしてそれをもつとよく見ようとして、近眼の私が目を細くして見ると、彼の真つ黒な背なかにも、三枝のと同じやうな特有の突起のあるらしいのが、私の眼に入つた。／私は不意に目まひを感じながら、やつとのことでベッドまで帰り、そしてその上へ打つ伏せになつた。

かつての三枝の背の突起への愛撫は、堀の師芥川龍之介が自死の三日前(昭2・7・21)小穴隆一を訪れて足首から先を欠く小穴の脚を撫でさせて貰つた、という(小穴「訪問録」、昭31・1中央公論社刊『二つの絵』)、尋常とは云い難そうな逸話を連想させようかと思うが、その三枝に似た少年の〈前屈み〉の姿勢は、どういふことなのか。また、少年のその様子を「私」がさらによく見ようとしたのは、どう解してのことか。まっ

たく何とも不可解だつたため、とは、この場合云えないのであつて、「体の或る部分を」見入つてゐると迄は既に判つてゐる(姿勢＝視線の方向だけでなくも対象まで特定できたものだが)のだから、それは見入つてゐるということ自体が見過ごせないやうな「部分」なのか、――なぜ？――と、その先は、続けるとすれば些か品位を損う恐れもなしとしな

い通俗心理学の祖述しか無さそうな感じだから、説述を端折る。説述は端折つても前後の文脈からして、客観的当否はともかく堀がなした意味づけとしては、三枝の背の突起(――への愛撫)がそれだけの意味ではなかつたらしいことは察せられよう。

が、しかし、そのように洞察したところで、この件の〈肉体性〉は所詮象徴的・間接的なものとどまる。「草の花」で同性間の肉体関係というものはつきり言葉に表わした(当人の実行爲として存在はしなくても。前述)福永が〈奇麗ごと〉と評するのは肯けそうでもあるが、一方、そのようには評さなかつた川端が読んだ前月の雑誌初出本文には、初刊本(昭8・12四季社刊『麦藁帽子』)以降削除される次のやうな一節があつた。

(そんな事があつてから、私と三枝との友情はいつしかその限界を超え出した。)――私は、私と彼との場合には、彼の方が女であるのを認めた。が、それと同時に私の知つて驚いたことは、彼が魚住に対しては男の役割に廻つてゐるらしいことだつた。しかし彼は私を知つてから、その男の役割を嫌ひ出してゐるやうに見えた。それよりも私には、あの魚住が何時も女であることを発見したことは意外だつた。私は、彼がいつか植物実験室の中でちらりと私に見せた、あのコケティッシュな女らしい様子を思ひ出さずには居られなかつた。そして私は、性と云ふものがどうやら私の想像もして見なかつたやうな、思ひがけない仮面をつけてゐるものであることに気づき出した……／魚住はすぐ、外国の町で自分の同国人を認めるやうな

一種の直覚でもつて、私と三枝との関係を見抜いたらしかつた。私は彼に何時ひどい目に会はされるかも知れないと思つて、絶えず彼を恐れてゐた。しかしどんな遊戯にでも加つてゐる以上は、その遊戯の規則を勝手に変更することは出来ないのだ。そんな理由からか、私は間もなく、魚住が私に対しても、三枝に対すると同じやうに、女の役割に満足してゐることを認めた。

(傍点原文)

ここでの「男の役割」「女の役割」とは、「女らしい様子」とも云つてゐる(女のような、ではない)ことから見て、一般的な態度物腰の剛・柔の比喩などではなく同性間交渉を異性間交渉に擬しての行為分担を指している。

異性間恋愛にプラトニックと然らざるとがあるやうに同性愛にもフィジックを含むものと含まざるとがあつていい(含まなくても同性愛とよんでいい)だろうが、しかし、含まない場合には、女のような態度等々は有り得ても(そう云われて想像できても)、女であるといつたらどういうことか、見当がつかないのではないか。つまり右の削除部分は、一方が男(であり)他方が女(である)ことによつて成り立つフィジックな交渉を含むもの——最終行為まで実際になされたかどうかはともかく(三枝と魚住の関係の最初の瞥見が寢室でなのは暗示的だが)、コンセプトとしては含むもの——になつていたことを、明示してしよう。具体的描写(脊椎カリエスの痕の件のような)を伴わず説明だけという不足感はあるが、しかし「草の花」では念頭にはあつても否認に傾いてゐる事柄が「燃ゆる頬」では少なくともオプシオンとしてなら確実に容認されている。この差違は小さいか、大きい。〈奇麗ごと〉はむしろ「草の花」の方、という見方も成り立つ。

そこで、或いは福永は「燃ゆる頬」を、右の部分を欠く刊本文で読んだか、との臆測は、彼が凝り性には定評があり、また、げんに新潮社版七巻本・六巻本両全集(昭29・33刊)の編集に携わつて直接自分の手

で初出稿も処理している事実から、非現実的である。

となると結局、福永が顧みて他を云つたものと見るか、さもなくば、「草の花」と違つて肝腎の事が存するにもかかわらず抽象的な説明で済ませてしまつた、その点を指摘したものとも推測するほか無さそうである。

そしてついでに、ではそれをとくに問題としなかつた川端の場合はどうと、雑誌初出翌月の川端の評は右の部分を含む初出本文以外に拠りやうがない。であれば、抽象的説明での切り抜けをも川端がとくに見咎めようとしなかつたことは結果的に疑えないが、この、福永との〈寛・厳〉の差は、両者の資質や小説観等の本質的な問題に溯らせる前に、考慮に入れるべきことが一つある。それは、福永の「草の花」に対応するものとしての川端の「少年」(昭23・5・24・3)の、在り方である。

五十歳に達したこと「を記念する心も含めて」最初の全集を刊行することになり、作家となる以前の文章類を「ひっぱり出してみた」中の「中学時代の日記」の抄出を中心とするこの作品のテーマは、寄宿舎で同室となつた下級生への愛着である。表現の点では、自分用の記録と三十年後に付した解説・回想だから、即物的或いは淡々としていて、小説「草の花」のような情感のパフォーマンスの豊かさはない。しかし内容的には逆に人目を氣にかけぬ、

床に入つて、清野の温い腕を取り、胸を抱き、うなじを擁する。清野も夢現のやうに私の頸を強く抱いて自分の顔の上にのせる。私の頬が彼の頬に重みをかけたり、私の渴いた唇が彼の額やまぶたに落ちてゐる。(略)半時間もこんなありさまがつづく。(五)

といった記述もある。もつとも、そこ迄であつて、「私はそれだけしか」とめぬ。清野もとめてもらはうとは思つてゐぬ」のだが、これを云いかえれば〈それ〉以上の行為があり得るのを知つてゐる点は「草の花」に準ずる。

しかし福永との違いとしては、福永の評（初出、昭33・5）が自身既に「草の花」を発表している立場でのものなのに対して、川端は「燃ゆる頬」に絶賛だけを呈してのち十六年もの間、自身の体験を「秘密として」^{（註3）}「作品には出さなかつた」（新潮社版十六卷本全集第一巻あとがき、昭23・5）と云う。その、まだ〈秘密として〉いた昭和七年の時点では、抽象的でも駆け足でもとにかく〈作品に出し〉た堀を、その点で批判する気は起きなかつた——という推測は、些か常識的だが頭から否定はできまい、と云つておく。^{（註4）}

さてそこでもう一度福永の評に戻ると、「燃ゆる頬」がフィジックな面を存在させながら説明だけで切り抜けたことが批判を招いたものか、と想像した。それはそれで理屈は通ると思う（というより、それしか考えようがあるまい）が、同時に、「燃ゆる頬」が逃げたのは同性間の具体的描写だけでなく、異性間に関してもまた、こちらはもつと徹底して省かれている（前述）ことを失念してはなるまい。つまり、そのことを以て〈奇麗ごと〉と云うなら「燃ゆる頬」は何から何までそう云えるのである。

II

〈評〉を離れて作品本文自体に戻る。

いわゆる読解のレヴェルではとくにここが難解という個所も無さそうな作品だが、一つだけ途惑わせるのは、冒頭の一段の終りに

かうして私の脱皮はすでに用意されつつあつた。そしてただ最後の
一撃だけが残されてゐた。……

という「最後の一撃」が、具体的にはどういう（後文中の）事柄を指すのか、そして、それにより完成した「脱皮」とはどういう状態からどういう状態への変化か、である。

一往、二通りの解釈が考えられよう。

(イ)「一撃」は、次段以降の魚住の接近や三枝との親近。「脱皮」は、それによる性愛（同性愛も性愛の一種類、少なくとも一端ではある）への目覚め。

恐らくこの方が素直に同意しやすそうだが、論理の上からはもう一案、
(ロ)「一撃」は、三枝との旅行先での漁村の少女との遭遇。「脱皮」は、それによる、同性愛から異性愛への（三枝から「多くの異様な声をした少女ら」への）移行。

(イ)・(ロ)それぞれの論拠は次のようになる。
まず、(イ)への論理。

〈こうして〉脱皮が用意されつつあつた、と云うのだから、〈脱皮〉の前半乃至序盤は前文中で起こっている事柄であるわけだが、前段に述べられているのは旧制高校の寄宿舎に入れられた「私」の環境の変化という一事であり、げんにその具体的叙述に先立つて

さういふ環境の変化は、私の性格にいちじるしい影響を与へずにはおかなかつた。それによつて、私の少年時からの脱皮は、気味悪い・ま・でに促されつつあつた。
（傍点引用者）

と、〈脱皮〉との関係を明言されてもいる。

その、「変化」した結果の新たな「環境」の基本的性格は、同室者中最年少の「私」が

仲間はずれにされないやうに、苦しげに煙草をふかし、まだ髭の生えてゐない頬にこはごは剃刀をあてたり

しなければならぬやうな、すでに大人だったり又はより大人に近づいている同性達の世界、「汚れた下着類のほひ」が「夢の中にまで入ってきて、まだ現実では私の見知らない感覚を、その夢に与へ」る世界である。

〈まだ現実では見知らない〉感覚と云うただけでは不特定、殆ど無限

に近く種々様々だろうが、同性達の「汚れた下着類のにおい」が与える感覚となるとかなり限定されよう。とすると、そうした世界と次段以降の同性間交渉とは、総体と部分、或いは原因と結果といった関係として捉え得ようから、「へこうして」用意され、「それによつて」促されつつあったところの脱皮を完成した最後の一撃とは、この世界のいわば最突出部または極致としての男子同性間交渉のこと、と、ごく自然に受け取れるのではないか。

また、魚住の接近と三枝との親近とを合わせた叙述量は筑摩書房版全集で全十三頁中の七頁を占め、それに続く①旅行先の漁村での少女との遭遇 ②旅行の打ち切り ③帰京後の疎遠化 を描く四頁分も二者択一式にいえば同性愛モチーフ——の一部（終焉部分）——だから（異性愛にはまだ入っていない）、それも含めれば作品本文の約八十五%に及ぶ。この占有率は、「私」の脱皮を完成する「最後の一撃」の描かれ方としてふさわしかろう。

——と、それやこれやで（イ）の理解はますます穏当なものに思える。

ところが、それに待ったを掛けるのが、右「三枝への愛の終焉」まで述べ終つて、即ち冒頭の新環境の紹介部分から通すと全体の九割強まで進んでから、最後のサナトリウムの段に入る前に置かれた

それから数年が過ぎた。／その数年の間に私はときどきその寄宿舎のことを思ひ出した。そして私は其処に、私の少年時の美しい皮膚を、丁度灌木の枝にひつかかつてゐる蛇の透明な皮のやうに、惜しげもなく脱いできたやうな気がしてならなかつた。

という一節である。

「寄宿舎で」脱皮して来た、という点は、前述の（イ）解とべつに抵触もしないのだが、「其処に……惜しげもなく脱いできた」というのは、脱皮前の状態が惜しむに値した（のに、）ということだろう。だが、魚住や三枝と出会う以前、「環境の変化」が「著しい影響」を与える以前

の「私の性格」や生活習慣やは、じつは具体的には何も示されていない。どんなものが失われたのか全く判らないままにその喪失を嘆かれても、読者としては共感しようがなからう。とすると、「脱皮」して置いて来た抜け殻とは魚住・三枝との出会い以前の何事か何物かではあり得ず、消去法によつて繰り下げられて出会い自体（とその後の交渉）をこれに擬すなら、こちらは十分、惜しむに値しよう。

かく辿つて来ると、寄宿舎に「脱いできた」のは魚住・三枝との出会いを含めての「少年時」であり、脱皮を完成させた「最後の一撃」とは、少年時の最後を華やかに彩ったところの同性愛さえも褪色させた、漁村の少女との遭遇、そして「脱皮」した行く手に新たに展けたのは異性に向かう・大人の愛と生、——という（ロ）の解釈が、末段までを含めての作品本文全体に対する適合性を認められよう。

そこで改めて（イ）と（ロ）の適合し方を対比すると、（イ）は、残念ながら何といても全体の九割強まで進んだ所までの印象に基づく。普通はそれがそのまま全体のトータルに雪崩れ込むのだろうが、この作品の場合、九割強まで進んでから前述の異議申立てが出て来るのだから仕方がない。従つていずれが正解ということになるのかという点では議論の余地はないのだが、では、（イ）は単なる早計・粗忽の結果の誤読かというと、それは却て粗忽な断罪と思われる。

と、いうのは、——

「一撃」「脱皮」が最終的に何をさしているものと結論されるか、ということと、ごく自然にそう受取れるか、それとも納得するのに抵抗があるか、ということとは、べつの問題である。前項については異議を唱え難くても、後項についてはそう単純ではない。

前述、「九割過ぎるまで（イ）と受け取らせる（誤認させる、でもいいが）筋道」が承認されるなら、それを残りの一割弱で「誤り」たらしめるような構成というのは、十分適切とはいえないのではないか。具体的に

えば、同性愛がそれ自体〈脱皮〉の成果と思わせ（思い誤らせ）てしま
う程、筆を費やし、赫やかしく描かれてい過ぎるのではないか。

それ程に赫やかしく魅惑的に感ずるのが読み手の錯誤でない（叙述量
の多さは争う余地がないが）証拠は、それを〈脱いできた〉ものと云い
切ってどんでん返しをくわせた（？）末段の、その結尾である。別の少
年の背に三枝と同じ痕を発見した時、

私は不意に目まひを感じながら、やつとのことでベッドまで帰り、

そしてその上へ打つ伏せになつた。（一行アキ）少年は数日後、彼
が私に与へた大きな打撃については少しも気がつかずに、退院した。

念を押すまでもあるまいが、「私」は既に「多くの」変声期の少女に出
会って「一人として私を苦しめないものはな」い程の交渉を持ち、その
結果として「はげしい咯血」をしてサナトリウムに入っているのである。
その（段階での）「私」が、なおかつ三枝の記憶の復活にこれだけの打
撃を受けるといふことは、取りも直さず（殆ど云いかえにすぎないが）、
「私」の中の〈三枝―体験〉が単に眠っていただけで死滅してはいず、
〈少女―体験〉によって入れ替わられて（存在する場を失って）もいな
かった、ということであろう。言葉尻をとらえれば、〈私の少年時〉は脱
ぎ捨てて来られなど、してはいなかった、それは錯覚にすぎなかった、
ということである。

〈寄宿舎……に……少年時の美しい皮膚を……惜しげもなく脱いでき
た〉という回想に従って（イ）の解釈を否定し（ロ）に就いたのだが、その決め
手の回想が錯覚だったのなら真実を知らぬは本人ばかりということであ
り、実際はより真実に近かった（ということになる）ところの（イ）解が本
文の自然な印象によって導かれていて、至極もつともだったわけである。
あらためて両解を端的に対比すれば、「私」自身の認識としては（そ
れに拠るなら）（ロ）だが客観的事実としては（イ）に近い、といったところであ
ろうか。

ところで、尋常な〈大人〉として異性に向かつて過ごした年月が、そ
の実、それ以前の同性に向かった少年時を消し去っていなかったという
事態は、作中仮象のみならず作者の私生活事実としても——少なくとも
本人にそう自覚されるのは——有り得ること、と、文学的にはせざるを
得ないようで、例えば前引「少年」の作者川端は同作に関連して

私はこの（清野少年との）愛に温められ、清められ、救はれたので
あつた。（略）それから五十歳まで私はこのやうな愛に出合つたこ
とはなかつたやうである。（十六卷本全集一卷あとがき）

と誌した。念の為に云うなら川端の結婚は大正十五年に溯り、これはそ
れから二十年を経ての結論である。

しかしここで、それでは「燃ゆる頬」の作者にも、異性（との交渉）
がそれ以前の同性（同上）を消し得なかつた（ことを悟る）という経験
があつたのだろうか、といった詮索はしない。正面切つた理由としては、
前引福永文ではないが本稿筆者もまた作品・私生活二元論を採る（対象
作家の実情とは別に、こちらの姿勢として）し、そうした文学観は措い
ても、堀の場合は川端乃至福永のような〈物証〉に欠ける。

物証と云つてしまったからその対比で心証あるいは状況証拠的には、
例えば阿比留信氏が堀と堀に兄事した詩人立原道造の間について、追分
油屋旅館の夕食時の、いわば痴話喧嘩の後めいた、「たしかに特異だつ
た」様子を印象に留めており（「一枚の絵ハガキ」、「文芸」昭32・2臨
時増刊「堀辰雄読本」、一方の立原は「短い生涯をいつも数多くの親し
い友人たちに囲まれてすごした」が「そうした交友のなかには、ふとホ
モセクシユアルの匂いもひそんでいることがある」と、最も早い単行研
究書（田中清光氏『立原道造の生涯と作品』、昭31・11書肆ユリイカ）
で評されている。「ホモセクシユアル」がかなり広い意味で（〈フィジッ
ク〉に限定しないで）云われていることはいう迄もあるまいが、その限

りでは、立原がその夭折の前年堀に文学上の〈訣別〉を告げた書簡（昭13・10・19付）の中の幾つかの文言も又、そう謂えよう。

だがしかし、最初に心証・状況証拠と云ったように、そう見れば見える、或いはそうであったとしてもおかしくない、といったものであつて、いわゆる女性的な心理傾向の人物が時として示す態度、と云つて通らないものでもあるまい。しかも堀が立原と識つたのは恐らく昭和七年。「燃ゆる類」に原体験を推測するなら堀が旧制一高に入学した大正十二年の春から夏に想定するのが最も筋が通るが、そこまでかたく考えないとしても、一月号に「燃ゆる類」が掲載されるその年の識り合い（翌八年のこととする年譜も多い）では話にならない。

そして立原以前の、より原体験に擬し得そうな年代の事としては、少なくとも現段階ではゴシップの形でさえ伝えられてはいない。世に《堀辰雄神話》という語もあつて、その私生活に関わる情報にはスキヤンダルめいても受け取れそうな要素が殆ど含まれていないことは定評があるが、とにかく無いものは無いのであり、有つてもよさそうというだけのプリミティブな自然主義風論議は空転するしかない。

それよりも留意すべきは、このようにⅡこれ程に（Ⅰ節及び本節前半参照）同性愛を描き上げ（描き立て？）た堀なのに、

①この作品以外に同性愛を描いたのはただ一回、それまでの諸短篇の縮約・総集篇風な「顔」（昭8・1『文芸春秋』）の中で、一年前の「燃ゆる類」に似た

年上の円盤投げの選手（「燃ゆる類」の魚住に相当）

路易（主人公。「私」に相当）

同級の「血色のよくない、痩せた」少年（三枝に相当）

という三角関係を約五百字に簡約して「再出」させているだけであ

ること（あくまで再出で、二回とはいえても二種類とは做し難い）。
②一方、異性愛についてはこの作品の前にも後にも、この作品での同性愛に於ける程度にまで「露骨」な描き方は見当たらないこと。
の二点であろう。

後者の例証（「見当たらない」ことの例証）としては、

A・（公園のベンチでの逢引の後）僕は等（ママ、註9）はベンチから立上る。僕は彼女の腰のまはり（ママ）がひどく皺になつてゐるのを見つける。そのベンチのために出来た皺は僕の幸福を決定的にする。

（「無器用な天使」、昭4・2）

B・（震災の避難行の途中、仮泊して）ふと目をさますと、誰だか知らない女の寝みだれた髪の毛が私の頬に触つてゐるのに気がついた。私はゆめうつにそのうつすらした香りをかいだ。（略）私は眠つたふりをして、その髪の毛のなかに私の頬を埋めた。

（「麦藁帽子」、昭7・9）

C・（同右）二人は体をくっつけ合つて横になつた。（略）路易は自分に体をくっつけて寝たふりをしてゐるその娘に何度も頬ずりをした。

（「顔」、昭8・1）

D・（或る温泉場へ誘い出した小旅行の折、溪流のほとりの道で）路易が気づかほしさに下の方をのぞきこんでみると、連れの娘も一しよにそれを見ようとして、その顔をぐつと彼の顔に近づけた。その頬が匂つた。すると路易は夢中にその娘の肩へ手をかけながら、荒あらしくそれを引きよせて頬ずりをした。（略）帰りの汽車の中で（略）路易はまださつきの味の無い接吻のことを考へてゐるらしく、（略）自分のこれまでにした唯一の接吻、地震のごたくさまぎれに小さなみすばらしい娘にしてやつた、あの後味の大へん苦かつた接吻のことなどを思ひ出すともなく思ひ出してゐた……。 （同前）
等が挙げられる。蛇足とは思ふが一言註釈を付せば、Dの前半及びCは

D後半によれば頬ずりに留まらなかったわけだが、前引「燃ゆる頬」刊本削除部分の〈男・女の役割〉云々は接吻以上に亘る（―ことを想定した）関係に於ての発想と考えられる（〈男として〉の接吻と〈女として〉の接吻という区別はあるまい）し、A・Bは感覚の生々しさ乃至昂まりは然るものとしても所詮行為ではない。常識的な比較として、接吻の深さに於て「燃ゆる頬」削除部分には及ばぬものとしてよからう。

これと対比していえば、川端には、例えば「舞姫」（昭25・12・12・26・3・31）の、朝日新聞連載中書き直しを請われた（沢野久雄氏「舞姫誕生」、昭47・10実業之日本社刊『川端康成点描』）という、中年のバレリーナの女主人公が夫に抱かれて、「自分をおさへるのだが」

さういふうつろにしばらくゐるところを、またゆりかへされて、こんどは、閉ぢた目のうちに、金の輪がくるめき、赤い色が燃えるのだった。

（「寝ざめ目ざめ」）

という描写があり（書き直して、なおかつ）、かの代表作「雪国」（初刊、昭12・6）冒頭には、有名な、それ「だけが、これから会ひに行く女をなまなましく覚えてゐる」「女の触感で今も濡れてゐる」「かのやう」な島村の「左手の人差指」や、「額に皺立て顔をしかめて懸命に自分を抑へ」ながら「酔ひで半ば痺れ」、「よろこびにさからふためにそでを」咬む駒子の姿が描かれていた。

福永も又、例えば「海市」（昭43・1）で「さういふ時にも、汗ばんだ頬に髪をこびりつかせ、眉をしかめ、眼を閉ぢ、目蓋を痙攣させ、鼻孔をふくらませ、唇をやるせなく戦かせてゐる彼女」の相好を描いている。勿論時代差（検閲の問題）も大きかろうが、これに匹敵する表現が同性間の場合には同時代に於ても見られないのだから、ここ迄何程かの共通点（堀との）も見て来た川端であり福永であるが、そして多分彼女の方が尋常なのだが、ともかく堀とは違うのである。

——さて、以上①②の中、②だけを取り上げれば、それは堀の愛着・

嗜好——より正確には、そうした愛着・嗜好（勿論作者としての）——が異性（―愛）よりも同性（―愛）に対して強かったから、という推測があつたり成り立ちそうだが、①は、それでは（それだけでは）訝かしい。①②を合わせてカヴァーする仮説は、堀の、作中の〈性〉表現に対する節度、自制のきびしさといふことではあるまいか。^{（註10）}

同性愛は異性愛に比して、通常一般の読者にとっては体験のみならず知識も乏しく（現在もそういえようが堀の時代にはなおさら）、作中形象となつても親しみは薄いから、その露骨さは実感的な生々しさには直結すまい。作者の表現というより読者の受容に或る節度を保たせようとすれば、それを同性間関係の叙写に封じ込めるのは一つの方策ではなかつたらうか。そしてもしそういう意図があつたとすれば、同性間に就いてではあつても不検束な反復は抑制されることになつたらう。

——以上は全くの仮説であり、しかもその着想の源泉は研究者としてよりも年少時からの一ファンとしての心情かとも思える。そうではあるがしかし、凡そ仮説とは、究極的には、そう仮定すると説明が付き納得される事柄の量・質によつて承認不承認が決まるものである。だとすれば右の仮説も、承認を期待してここに書き添えることがさほど不謹慎とは思えない。

註1 〈藤木〉本人ではなくてその妹に対する福永の愛への直接の言及は、福永自身にも第三者の回想（例えば次註）にも、無く、稿者としては虚構の疑いも抱いている（本『紀要』二十五号収「^{福永}武彦『草の花』年立考」考証19参照）。

2 矢内原伊作氏「草の花」の頃（昭48・11新潮社刊『福永武彦全小説』二巻付録「月報」2）。なおついでながら「燃ゆる頬」の場合も、堀の複数の作品に対して時に換骨奪胎的な影響さえ指摘されるレエモン・ラディゲにも邦訳題名が本作と同じ詩集（原題「Les Jours en Feu」, 1920）があ

るが、作品内容上の依拠は考え難い。

3 「小字の一つ」に「水平社の部落」をもつ村の出身の外交官の少年時の体験として点出されている「二十年」（大14・11）があるが、これは主人公の設定からみてフィクションと解される（――べきもの、と川端は云っている）わけであろう。

4 堀が川端にとって、二年前まで雑誌『文学』（昭4・10・5・3）の僅か七人の編集同人仲間であり、又、その出世作となった「聖家族」に川端の僚友横光利一が記念碑的な絶賛を呈している（江川書房版『聖家族』序、昭7・2）、といった事情を全く無視しては甘からうが、それを持ち込まなくても考え得る段階にまで持ち込むのはもつと警戒すべきであろう。

5 例えば大岡昇平に「芥川の稚児さん――でもないだろうけれども、そんな風に可愛がられてた」という発言（座談会「堀辰雄文学を截断する」、『文芸』『堀辰雄読本』）があるが、発言の後半で判るように比喩である。

6 例えば、堀の養父が堀の生母の死後に側に置いた婦人への堀夫妻の対応についての或る〈粉飾〉（堀多恵・中村真一郎対談「堀辰雄・思い出すことなど」、『国文学』昭52・7）が、実例として挙げられよう（小稿「存疑・堀辰雄のフェエドル的体验」説、昭55・1有朋堂刊『論考堀辰雄』）。

7 小稿「堀辰雄の人と作品」2（『月刊国語教育』平1・2）参照。

8 「顔」にはその他に、「少年の時から、彼の氣に入りの友人と言へばみんな彼の恋人のやうなものだつた」とか「同性の恋人」とかの云い方をばら撒いた二百字余の段落があり、この部分には母胎作品が見当たらないので或いは編集作業の間にふと洩れ出たなまの回想とも疑えるが、しかし余りに抽象的・暗示的、かつは断片的に過ぎて、単独に意味をもたせようとするには無理であろう。また、「二十一になつた」路易が新たに知った友人の一人が「乗合自動車の中で」「冗談のやうに彼に耳打ちし」、「路易はそれについて」と笑つて見せた」とか、その友人の横顔が「昔の円盤投げの選手」に似て見えたので「また、いちめられるのかなあ……」と「おもはず目を伏せた」とかあるが、結局この友人は路易に気易く金を借りたり女との仲介を頼んだりするだけなので、「燃ゆる類」の魚住には勿論のこと、へいじ

められた」という、陰微ながら明らかにフィジックを含むと思われる表現になっている円盤投げの選手にさえも、並べ難い。当然、「燃ゆる類」に累加するもう一つの同性愛作品（部分）とは做し得ないのである。

9 初出時表記。なおAとDすべて引用本文は初出形。

10 前引「燃ゆる類」には及ばない。対・異性事例も、昭和十年代に入ると全く影をひそめる（外形的には唯一の例として挙げられようかと思われ「曠野」〔昭16・12〕結尾の抱擁も、心理的・感覚的には殆ど病者の介抱、極言すれば臨死儀礼であろう）から、堀の作品史としてはこれすら初期のみのことと謂えて、作家堀の全体像としての〈節度〉は事新しく云う迄もなさそうだが、少々毛色の変つた「燃ゆる類」も又、そうした把握の下に収まるのではないか、ということである。

【付記 本稿筆者はかつて十余年に亘つて堀文学を論文量産の対象とした経歴をもつ（「堀辰雄主要研究文献目録」、『国文学』昭52・7）が、偶々「燃ゆる類」については論う機会がなかった。昨夏、『考証少女伝説——小説の中の愛し合う乙女たち——』（有朋堂）を上梓したところ、それとこれとを突き合わせて〈逃がっているのですか？〉と質して（詰つて？）来た未見の友人があり、そんな浪漫的な事情など無いことの証しにもと本稿を草した。

しかしお蔭で、旧著「堀辰雄の世界」（昭47桜楓社）・「論考堀辰雄」（昭55有朋堂）及びその後の雑誌等掲載稿中「『麦藁帽子』の位置と意味」（四季派学会論集第二集、平2・3）・「花を持てる女」の経歴」（本紀要十二号、昭63・9）と合わせると堀の主要作品には二往ひとわたり言及した形にもなり、どうか一区切りつけられたような気分を味わっている。

平7・3・25】